

～院長室から～

非専門医のための肝臓病入門

その5「生活習慣病としての肝臓病」

院長 与芝 真彰

専門外来紹介 vol.1

「手外科外来」

整形外科 院長 筋野 隆

東日本大震災 医療支援報告

看護部 荒木 梢

TOPICS

●専門外来のお知らせ

News&News

●第9回高輪・品川医療セミナー
開催報告

●第18回せんぼ医療感染講習会
開催報告

●第7回コミュニケーションセミナー
開催のお知らせ

●第14回地域医療懇話会・懇親会
開催のお知らせ

vol.36
2011.9.1

せんぼだより
うえーぶ
Wave



せんぼ

東京高輪病院

地域医療・支援センター

地域医療連絡室

〒108-8606 東京都港区高輪3丁目10番11号

TEL:03-3443-9576 FAX:03-3440-9570

http://www.sempos.or.jp/tokyo

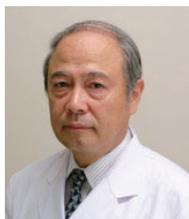
病院理念

心のこもった医療を安全に提供します。

せんぼ東京高輪病院

非専門医のための肝臓病入門

その5 生活習慣病としての肝臓病



よしば しんしょう
与芝 真彰

せんぼ東京高輪病院 院長

我国はアジア大陸の東端に位置し、感染症の多い東南アジア諸国の一員です。明治維新後明治政府は国力を増大させるために「脱亜入欧」の掛け声のもとに進歩した欧米の政治システムや科学技術の導入に努めました。然し、この地理学的な位置関係を変える事はできず、明治維新後も日本人は赤痢、コレラ、チフス、結核、梅毒など多くの感染症に苦しめられました。我国がドイツ医学を積極的に導入した理由も当時世界で最も進んだドイツ衛生学の知識や技術により、民間人を救済する以上に折角作った虎の子の軍隊を感染症から守る事が主目的であったと思われます。

肝臓病の世界も同じで、我国で肝臓病と言えばこれ迄B型肝炎、C型肝炎などのウイルス肝炎、つまり感染症がその代表格でした。B型肝炎ウイルスはアフリカ原産で、それがExodus（モーゼの指導によるユダヤ民族のエジプトからの脱出）のようにシナイ半島を通して全世界に拡がりました。我国にはアジア大陸や南方からの渡来民を通じてやってきました。C型肝炎の原産地は不明ですが、B型と同様血液を介して感染します。我国では戦後「大輸血漿時代」とも言える輸血と血漿製剤の濫用時代があって、一挙に広まってしまうました。C型肝炎は静脈用麻薬、イレズミでも移るので世界にも患者も多数居ますが、これ程C型肝炎患者が多いのは我国に特異的な現象です。

然し、供血者スクリーニングやワクチンの発達、治療薬の進歩でこれらウイルス肝炎の克服も近い将来夢

ではなくなりつつあります。戦前は結核も良い薬が無く、栄養、安静、大気療法のような患者の自然回復力に頼る治療位しかありませんでしたが、ストマイの発見以降大半が薬で治るようになりました。昔は栄養、安静など結核と同じような治療をしていたウイルス肝炎も薬が進歩して治るようになりつつあります。そのうち専門医でなくても治せる時代が来る可能性もあります。これが専門医にとって感染症の恐れ所です。

それと期を一にして最近では生活習慣病としての肝臓病の存在が重要視されるようになりました。代表選手と言えばアルコール性肝臓病、過栄養性脂肪肝ですが、薬剤性肝障害も入るでしょう。これらは人類特有の弱点に根差した宿命的な病気とも言えます。人はストレスに曝されると酒に走ったり、過食したり、薬で安心を求めようとします。生活習慣病は生活習慣を改善すれば治る事は解っているのですが、それができないのが人間の常であり、その克服は感染症の克服より難しいでしょう。

アルコールは蓄積的に毒性を発揮しますから、生まれてから飲んだ純アルコールの総量（ビールの純アルコール量は5%、日本酒は16%、ウイスキーは40%など）の計算が大切です（1トンを超すと人により肝硬変になる危険あり、女性はこの半分）。過栄養性脂肪肝も可逆的ですが、超肥満になったり、糖尿病やインスリン抵抗性を合併するとNASH（脂肪肝炎）となり、下手をすると肝硬変、稀に肝癌になります。日本人は余り太らないのに糖尿病、高脂血症、脂肪肝になり易い遺伝的要因があるようです。メタボリック症候群の前提は腹囲男子85cm、女子90cmです。これを超さないように注意が必要です。薬剤性肝障害と言えば昔は抗生剤、抗がん剤などの副作用の強い薬によるものが多かったのに、今は漢方薬やサプリメントでの肝障害が増えていきます。

感染症から生活習慣病へ、文明の進歩は疾病構造を変えるのです。

「手外科外来」のご紹介

せんぼ東京高輪病院 整形外科
すじのたかし
医長 筋野 隆



平成23年6月より整形外科の専門外来として「手外科外来」を開設しました。(第2、4金曜午後14時～ご紹介状をお持ちの場合、予約なし受診で当日診療可能です。)

「手外科」は大まかには上腕以遠に起こる痛み、痺れ、機能障害を診察治療する診療分野です。二足歩行を手に入れ、上肢の自由を手に入れたヒトが人間らしく生活するうえで必要不可欠な器官である手には神経、血管、腱など緻密に計算された組織が詰まっています。これらの組織はその緻密さゆえ、些細な損傷で大きく機能を損なってしまうということが起こります。また治療においても顕微鏡下での作業、専門のハンドセラピストによるリハビリなどが必要とされます。このような特殊な器官である手を専門的知識、技術を以て診療治療するのが「手外科」となります。

当院は以前より日本手外科学会の手外科研修認定施設に認定され、多数の手外科疾患を診療してまいりました。特に東大整形外科末梢神経診療グループ出身の医師により末梢神経損傷、腕神経叢損傷の治療を数多く行ってまいりました。手外科の中でも特殊なこの腕神経叢損傷については全国の病院からご紹介をいただいています。

これまでは通常の整形外科診療の中で診療をおこ

なっていました。一般外来の中では、おひとりにさける時間の制約があることから手外科外来を開設し、一人ひとりの患者さんの診察が時間をかけて行えるようにいたしました。

常勤医として川野健一（手外科専門医）、筋野隆、非常勤医として原徹也（日本手外科学会特別会員 手外科専門医）、中川種史（手外科専門医）高橋雅足が中心となって診療させていただきます。

また手外科においてリハビリは手術と同等あるいはそれ以上に術後成績を左右する因子です。当院には3名の作業療法士が在籍し、充実したリハビリをおこなっています。

手外科外来で取り扱う主な疾患は手指骨折脱臼、絞扼性神経障害（手根管症候群、肘部管症候群）末梢神経損傷、腱損傷、腱鞘炎（ばね指、ドゥケルバン病）、変形性関節症（ヘバーデン結節、母指CM関節症）、関節リウマチによる手指肘の変形、手指の腫瘍（ガングリオン、グロームス腫瘍）、キーンベック病、TFCC損傷、手指の変形（ボタン穴 スワンネック）、デュピイトレン拘縮などです。

上肢に関することなら些細な問題も含め気軽にご相談いただければと考えています。



Dupuytren 拘縮（術前）



Dupuytren 拘縮（術後）

東日本大震災 医療支援報告より



本部ミーティング風景



本部薬品コーナー

東日本大震災医療支援活動報告

被災地の状況と今後の医療支援

看護師 荒木 梢

— 宮城県気仙沼地区 平成23年5月29日～6月1日 —

※当院派遣チーム：小山副院長、看護師 佐久間和美・荒木梢、事務 瀬野 計4名

※医療救護班本部 気仙沼市民健康管理センター

巡回診療担当チーム数（各団体からの選抜による）15 チーム（構成職種：医師、薬剤師、看護師、管理栄養士、理学療法士、心のケアチーム他）、巡回対象避難（救護）所数：24 箇所

※1日のスケジュール：午前8時集合、全員によるミーティング（情報伝達・行程確認・交代チーム紹介）、ミーティング終了後薬品・医療器材の補充を行い出発、午前10～12時、午後2時～4時の時間割で対象避難（救護）所の巡回診療を実施。本部に戻り午後5時からミーティング（活動報告、情報伝達・交代チーム紹介）終了後解散

今回、発生後2カ月半経過した被災地に小山副院長をリーダーに2度目の派遣の佐久間看護師とともに活動してまいりましたので状況を報告します。

当院チームは気仙沼市本吉地区の6箇所の避難所を担当し、1日2～3箇所の巡回診療を行いました。避難所に向かう道路状況は瓦礫等の撤去により徐々に整備され、橋などの復旧はみられませんが、迂回路はかなり網羅され、孤立する避難所はありませんでした。しかし、5月31日にようやく電気が全面復旧したものの瓦礫や埃・匂いなどはまだまだ残っており、震災の激しさにあらためて強い衝撃を受けました。

各避難所の収容人数は最盛期の1/3～1/2に減っており、日中は勤めに出ている人も多く、残っている人は2割弱にあたる10～15人の高齢者が中心でした。巡回診療に伺ったと言うと、「遠くからご苦労さまです」と挨拶し、お茶を出してくれました。4日間で延べ53人とこの時期にしては比較的多くの患者さんを診察しました。被災者のなかには十分医療の必要な状態であるにもかかわらず「私は大丈夫」と、診察を受けたがらない方が何人かおりました。そんなときにはまずそばに座ってじっくり話を聞くと、徐々に心を開いてくれる様子を感じられ、診察・治療を受けていただくことができました。



避難所

ショックを受けたのは、初めて体験した「地鳴り」です。遠くから「ゴォー」と言う音が近づいてきたと思ったら、次の瞬間に「ドーン」と縦揺れがきました。その後も派遣中は数回この「地鳴り」を経験し、その都度近づいてくる音に身構える瞬間がありました。震度3ということでしたがそれでこの状態であるなら、3月11日の震災当日はどのぐらいであったかと思うと、心が張り裂けそ



道路脇の瓦礫

うな思いがします。同時に温かく迎え入れてくれた被災者の方々からは強さとたくましさを感じました。巡回中の昼時、車での移動中にスーパーに立ち寄り食事をしていると、突然、お店の人が「遠くからご苦労さまです」と言いながら鯛焼きの差し入れをしてくれました。医療救護班のジャケットを着たまま食べていたことに気づきました。そのスーパーは津波による影響はなかったようですが、すぐ前の道路の両脇は瓦礫の山で、そのような状況の中でも、人の温かさを感じた瞬間でした。

避難所の方々は笑顔を絶やさずとても強く生きている反面、口々に将来に対する不安やいまだに環境になじめず不眠を訴える方も少なくありません。今後は仮設住宅や避難所での生活が長期化することによる、精神的なストレスを取り除ける心のケアが必要であると感じました。被災者の方々が一日も早く元の生活に戻れるよう強く願うばかりです。



診察風景



避難所保健師と当院チーム（左から瀬野・荒木・保健師・佐久間・小山）

整形外科の「手外科」外来につきましては、本誌にてご紹介しておりますが第2・4金曜日午後に行っております。ご紹介よろしくお願いたします。

毎週木曜日に麻酔科 齊藤部長によりペインクリニックを実施しております。4月から開始後3ヶ月が経過しました。いづれ本誌にて症例報告できればと考えております。引き続き患者さんのご紹介をよろしくお願いたします。

9月から毎週火曜日、形成外科外来を開始します。

診療時間、予約方法など詳細につきましては地域医療連絡室(3443-9576)までご連絡ください。適応症例がございましたらご紹介くださるようお待ちしております。

News&News

第9回 高輪・品川医療セミナー開催報告



セミナー風景

RI機器の更新に伴い2月に実施した、第7回の「脳」に続いて「心臓」をテーマに企画したものです。3月開催の予定でしたが、震災の影響にて延期となり、7月8日に開催しました。東邦大学医療センター大橋病院 腎臓内科 准教授 常喜彦彦先生を講師に招き、「CKD診療に心筋シンチグラムが必要なわけ」の演題にて講演が行われました。よく話題に上る「CKD」がテーマということで皆さん熱心に聴講され、講演後も活発な質疑応答が交わされました。外部の先生16名を含む56名の参加でした。RI検査をテーマとしたセミナーについては、今後も定期的に開催していく予定です。先生方にはRI検査のご紹介についてよろしくお願いたします。

第18回 せんぽ医療感染講習会開催報告

8月10日午後7時から開催しました。今回は講師に愛知医科大学大学院研究科 感染制御学教授 三嶋廣繁先生をお招きし、「感染防止策～治療」のテーマで基本から最新の情報についてわかりやすく講演していただきました。

外部の先生15名を含む68名の参加人数でした。



講師 三嶋先生

第14回 地域医療懇話会・懇親会開催のお知らせ

例年11月に開催しております地域医療懇話会・懇親会も今年で14回になります。本年は下記の通り開催することに決定しました。詳細については10月はじめにあらためてご案内いたしますので、ご予約のほどよろしくお願いたします。多くの先生方の参加をお待ち申し上げます。

平成23年11月18日(金)
午後7時から

グランドプリンスホテル新高輪
国際館パミール1階

19時～ 懇話会「旭光」
「内視鏡下粘膜腫瘍摘出術」
(仮題)

20時～ 懇親会「暁光」

第7回

みなと・品川 コミュニケーションセミナー 開催のお知らせ

3月に実施予定でしたが、震災により延期となっていたセミナーです。あらためて10月に開催することになりました。今回から港区に加えて品川区のみなさまにもご参加いただき合同で実施することといたしました。診療業務において重要なテーマです。ぜひこの機会を逃さずお申し込みください。皆様のご参加をお待ちいたしております。

平成23年10月14日(金) 午後7時から 1階外来ホール

講演「患者さんと医療者のコミュニケーション」

講師 慶應義塾大学看護医療学部教授 杉本なおみ先生

編集 後記



台風が通り過ぎ、一時は涼しくなりましたが、8月に入りまた暑さも戻ってきたようです。節電対策で行っている高めの冷房設定温度にも、それなりの過ごし方で慣れてきた感じがします。震災、原発関連の重い話題が続くなかで、なでしこジャパンの快挙は心のそこから晴れやかになったニュースでした。被災者の皆さんと選手たちの互いの激励・声援が見えないパワーとなり輝いた栄冠だと思えます。すでにご承知のことと存じますが、当院では地域に根ざした病院として、先生方のご依頼にすべて応えられるよう医療連携・救急診療に院長をはじめ積極的に取り組んでおります。ご意見ご要望がございましたらぜひお聞かせください。